YOKOHAMA

横浜市

子どもの居場所づくり

課題解決ケースブック

Problem Solving Casebook

2020

目次

p1 事例集の発行にあたって

p2 横浜市「子どもの居場所づくり課題解決事例集」をご覧になる皆さまへ

p4 用語解説

p5 Case 1
おなかも心も満たす居場所
金沢子ども食堂/ホッとサロン すくすく
金沢区
広報周知 支援者の関わり 協力ネットワーク

p11 Case 2
外国につながる子どもたちへの学習支援
友(ゆう)ゆうスペース
神奈川区
支援者の関わり 役割の設定と運営 資金と場の確保 利用者・担い手の確保と対応 協力ネットワーク

p17 Case 3
横浜・東戸塚を拠点とするフリースクール
おっちー塾
戸塚区
利用者の確保と対応 担い手の確保と対応 資金と場の確保

p23 Case 4
都筑冒険あそび場
まんまるプレイパーク
都筑区
担い手の確保と対応 広報周知 ニーズ把握 人材養成 役割の設定と運営

p29 Case 5
学習支援・ごはん亭
山芋の会
南区
活動内容・活動方法 支援者の関わり 協力ネットワーク 資金と場の確保

p35 Case 6
子どもへの学習支援と一緒に作って食べる子ども食堂
アソシエーション　てらこや／こどもごはん
緑区
活動目標の決定・役割の設定と運営 活動内容・活動方法 場の確保・資金の確保・広報周知 子どもとの関わり

p41 Case 7
空き家を利用したコミュニティ
街の家族
青葉区
活動目標の決定・役割の設定と運営 運営方針・資金の確保（立ち上げ期） 利用者・担い手の確保と対応 スキル（人材養成） 資金と場の確保（現在・今後）

p49 編集後記

事例集の発行にあたって

　現在、全国的に、地域における「子どもの居場所」の活動が盛んになっています。

「子どもが生き生きと遊べる場所をつくりたい」

「楽しく学習して成長の喜びを感じて欲しい」

「不登校の子どもたちのチカラになりたい」

「食を通してお腹も心も満たしてもらいたい」

「子ども同士、子どもと大人、もっとたくさんつながりをつくりたい」

　居場所づくりをはじめるきっかけは様々ですが 、「子どもたちのために」という願いや想いは、同じです。

　このような地域の活動が広がる一方で、財源、担い手、活動場所の確保、活動の周知など、活動上の課題も顕在化しています。

本事例集は、課題を抱える団体が解決手段を得るためのヒントをつかんでいただくことを目的として、課題を乗り越えるために意欲的に活動を行っている団体の取組事例を掲載しております。

　ご多忙の中、取材にご協力いただきました各団体の皆様に感謝申し上げますとともに、この事例集を参考に、地域における子どもの居場所の活動がより一層活発になることを期待しています。

令和2年2月
横浜市こども青少年局

横浜市「子どもの居場所づくり課題解決事例集」をご覧になる皆さまへ

本紙に紹介する「子どもの居場所」7事例について

本紙に紹介する7事例は、すべて、横浜市民が運営する「子どもの居場所」です。

令和元年10月～12月、市内の「子どもの居場所」45か所に「子どもの居場所の運営状況にについて」調査を行いました。その結果、「子どもの居場所」を運営されている団体が、どのような目的を持って運営をされているのか、また、どのような課題を抱え、どのように解決にむけて取り組まれているのかが見えてきました。

本紙では、学習支援・子ども食堂・プレイパークなど、活動種別が異なる活動の選択について考慮しつつ、課題や解決法を詳細に回答してくださった7団体を選定し、更に、ヒアリング調査を行い、事例にまとめています。

「子どもの居場所づくり課題解決事例集」制作の目的

①「子どもの居場所づくり」の推進

次世代を担う子どもたちを、家庭や地域で支え、自らが持つ創造性やエネルギーを発揮しながら、たくましく生きる力と思いやりの心を持つ人間へと育んでいくことが必要です。

しかし、近年、人と人との関係が希薄になり、孤立感を抱え、自己肯定感が低下する中、人との出会いや多様な経験をすることに不安感を感じる子どもが増えています。

同時に、子どもの育つ家庭も様々な課題に直面しており、両親の共働きや長時間労働など、子どもが家庭においても、孤独で十分家族との時間に恵まれない等の課題も見えています。そのような状況下、地域において子どもたちが、

1）安心して安全に過ごすことができる居場所
2）人との交流や多様な体験を通じて社会に参加し自立・共生していく土台を育むことができる居場所

が求められています。

本紙で、市内、様々な地域、場所で、これらの目的を実現しようとしているキーパーソンや団体を紹介することで、「子どもの居場所づくり」が推進されることを目指しています。

②「子どもの居場所」の多様性を理解する

「子どもの居場所」は、多様性があります。子どもといっても年齢は、乳幼児から10代後半の青年期の子どもまで。また、生活のしづらさや育ちが阻まれている状況としては、外国籍の子ども、不登校など家庭に閉じこもった子ども、経済的貧困など家庭の課題がある子ども、障害がある、または障害の疑いがある子ども等、様々な子どもがいます。

また、それらの子どもに対する居場所や具体的な支援についても、近年、学習支援や子ども食堂が増えていますが、学習支援と言っても、教科学習支援だけではなく、多様なイベントや野外プログラムなど体験的学習の機会を作っている団体も増えています。子ども食堂でも、子どもたちに食の提供をするだけでなく、食事の作り方などを定期的に教えたりするなど、生きる力を育むプログラムをいれている活動が多くなっています。

更に居場所では、子どもに対してだけでなく、家庭についても手を差し伸べ、子育ての不安に寄り添い、経済的な課題がある家庭には、地域や様々な支援機関とネットワークを構築し、ニーズに応える支援を行っている活動もあります。

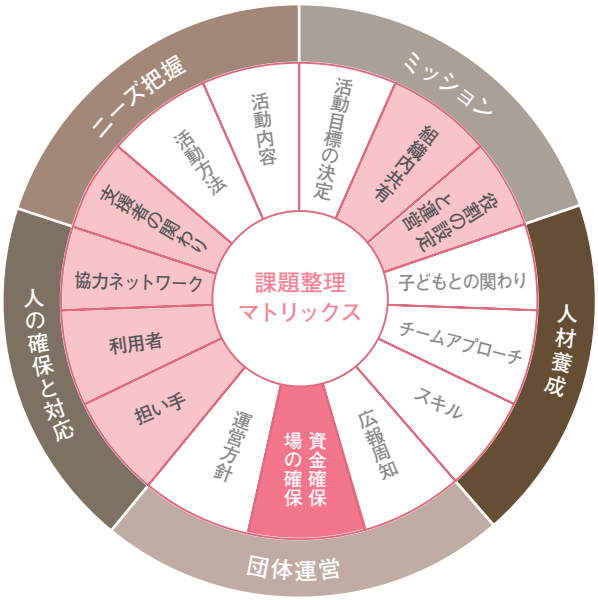
本紙では、できるだけ詳細に活動を紹介することで、「子どもの居場所」の多様性についての理解を深めることも目指しています。

③「子どもの居場所」運営における課題の整理と解決法を拓く

令和元年の秋に行った調査によって、「子どもの居場所」を運営する団体は、大きく5つ、更に15の課題が浮き彫りになりました。

課題の捉え方は、他の方法も考えられますが、本紙の3つ目の目的は、今「子どもの居場所」を運営する人や団体、また、今後「子どもの居場所」を運営しようとする人や団体が、活動上の課題に直面したときに、既に居場所の取り組みをされている団体の具体的な活動を知り、課題解決に役立てて頂きたいのです。

課題整理マトリックスの表し方・見方



各事例ごとのマトリックス上の色分けは、濃いピンクが「課題として最も解決しにくい項目」、薄いピンクは「課題はあるが、解決策を見出して運営できている項目」を示しています。

ミッション

組織としての使命を明確にして立ち上げ、運営継続している

活動目標の設定	短期・中期・長期的な目標を立て、計画的に取り組める
組織内共有	活動のミッションや目標を支援者の中で共有できている
役割の設定と運営	ミッションや目標を実現するための体制ができている

ニーズ把握

子どもや家庭の居場所に対するニーズの把握をしている

活動内容	把握したニーズに対応する活動になっている
活動方法	適切な活動ができるような方法を選び、実行できている
支援者の関わり	ニーズに対して適切な子どもとの関わりについて方針がある

人の確保と対応

団体のミッションを理解する担い手･主体的に利用する利用者･協力ネットワーク

担い手	団体のミッションを理解した担い手を必要数確保している
利用者	団体が対象としている利用者が想定した人数、主体的に利用を続けている
協力ネットワーク	活動を適切に行うことを維持・継続するために外部ネットワークを有する

人材養成

ミッションを実現するために必要な人材養成をしている

子どもとの関わり	子どもを理解し、より良いかかわり方を模索し学ぶ機会がある
チームアプローチ	団体の支援者が協力して子どもを育む意識や体制を育てている
スキル	ミッションを実現するための担い手が持つべきスキルの向上ができている

団体運営

団体の継続的な運営のための体制をつくっている

運営方針	ミッション・ニーズ・人材など、総合して運営継続する体制づくりや方針がある
資金や場の確保	団体運営を継続的に行う資金計画・場の確保ができている
広報周知	継続的に利用され、支援できるよう活動周知をおこなっている

今後、推進される「子どもの居場所」では、より多くの居場所活動をする団体同士がネットワークを構築し、また、居場所を支える公的機関や福祉・医療・教育など、子どもに関わる関係機関とのネットワークも構築され、より一層、居場所活動が活発に子どもに資する活動に発展してくために活用されることを目的としています。

用語解説

地域ケアプラザ（地域包括支援センター）

地域ケアプラザは、高齢者、子ども、障害のある人など誰もが地域において健康で安心して暮らせるよう、身近な福祉・保健の拠点として、地域住民の福祉・保健活動やネットワークづくりを支援している。活動や交流の場として、多目的ホールやボランティアルーム、調理室などを利用できるほか、ボランティア活動の相談も受け付けている。概ね中学校区圏域程度に１館設置され、令和２年２月現在、市内に 139 か所。

地域包括支援センターは、介護保険法に基づき、高齢者が住み慣れた地域で生活を継続できるよう必要な支援等を行うことを目的としており、横浜市では原則として地域ケアプラザに設置されている。地域包括支援センターには福祉・保健の専門員が配置され、高齢者の生活全般にわたる幅広い相談を受けるほか、介護予防や権利擁護に関する業務も行っている。

福祉保健活動拠点

市民の福祉・保健活動のための場（団体交流室、対面朗読室・編集室、点字製作室、多目的研修室）や機材（印刷機など）の提供及びボランティアの育成・相談・支援などを行っており、各区に１館設置されている。

地区センター

地域住民誰もが気軽に利用でき、自らの生活環境の向上のために自主的に活動し、及びスポーツ、レクリエーション、クラブ活動等を通じて相互の交流を深めることのできる市民利用施設。

コミュニティハウス

幼児から高齢者までさまざまな市民との交流や自主的な活動が行える身近な拠点として、幅広く利用することができる市民利用施設。

地域子育て支援拠点

地域子育て支援拠点は、就学前の子どもとその保護者が遊び、交流するスペースの提供、子育て相談、子育て情報の提供などを行う子育て支援の拠点で、利用登録のうえ、無料で利用できる施設。また、地域で子育て支援に関わる方のために研修会なども実施している。

放課後キッズクラブ

放課後キッズクラブは、すべての子どもたちを対象に、小学校施設を活用して「遊びの場」と「生活の場」を兼ね備えた安全で快適な放課後の居場所を提供することを目的として実施している。原則として、当該実施校に通学する１～６年生で、利用を希望する児童が対象。

放課後児童クラブ（学童保育）

放課後児童クラブ（学童保育）は、昼間に保護者がいない家庭の小学校１年生から６年生の児童を預かり、地域の理解と協力のもとに、児童に適切な遊び及び生活の場を与え、その健全な育成を図ることを目的として実施している。地域・学校・保護者の代表者等の方々で構成された運営委員会等が運営を行っている。

フードバンク

食品企業の製造工程で発生する規格外品をはじめ、まだ食べられるにもかかわらず廃棄されてしまう食品（いわゆる「食品ロス」）を引き取り福祉施設や生活困窮者等へ無料で提供する団体活動。発祥は米国で 40 年以上の歴史があるが、日本では 2000 年以降から活動が行われるようになり、2019 年までには、全国で 80 団体以上が活動している。

おてらおやつクラブ

「おてらおやつクラブ」は、全国のお寺と支援団体、信徒および地域住民が協力し、お寺にお供えされるさまざまな「おそなえ」を、仏さまからの「おさがり」として頂戴し、子どもをサポートする支援団体の協力の下、経済的に困難な状況にあるご家庭へ「おすそわけ」する活動。活動趣旨に賛同する全国のお寺と、子どもやひとり親家庭などを支援する各地域の団体をつなげ、お菓子や果物、食品や日用品を届けている。

国際交流ラウンジ

横浜市では、市内在住の外国人のための生活情報提供、相談を多言語で実施するとともに、日本語教室の開催、通訳ボランティアの派遣、日本人との交流活動などを行うため、国際交流ラウンジを設置している。運営には市民活動団体、NPO 法人、公益財団法人などがあたり、多くの市民ボランティアが協力している。

国際教室

日本語指導が必要な外国人児童生徒が５名以上在籍する義務教育諸学校には、学校の要請により指導担当者として教諭の加配措置が行われる場合がある。それに付随して、日本語指導を行う専用の「国際教室」が設置される。

Problem Solving

Case 1

おなかも心も満たす居場所

金沢子ども食堂 ホッとサロン すくすく

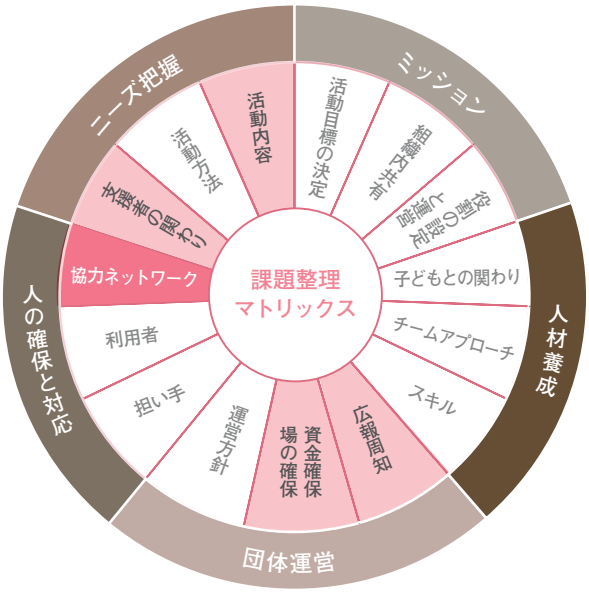
金沢区

課題1	広報周知
課題2	支援者の関わり
課題3	協力ネットワーク

Problem Solving

Case 1

金沢子ども食堂 ホッとサロン すくすく　おなかも心も満たす居場所



「すくすく」は子ども食堂を毎月１回開催するとともに、ひとり親家族への食料支援として、「ホッとサロンすくすく」も毎月１回開催しています。区内の多くの商店や企業からの応援を受け、また大勢のボランティアが参加して、毎回 50 人の親子が集い、おいしいごはんと共に楽しい時間を過ごしています。

この方にお聞きました

PROFILE

加々美 マリ子さん（62 歳）

川崎市生まれ。結婚と同時に金沢区へ転居。３児の母（現在長男 34 歳、次男 32 歳、長女 30 歳）2004 年より市内福祉施設に非常勤として勤務。
父がボーイスカウトや青少年に関わる仕事に従事していたため、いつも子どもや大人が出入りするにぎやかな家庭で、地域に尽くすことが当たり前、近隣と助け合うのが日常という環境で育つ。結婚と同時に金沢区に在住。慣れない土地での育児から、子育てサークルを立ち上げ、また、はまっ子のスタッフを勤めるなどしていた。
長男（現在 34 才）が中１の時、いじめをきっかけに不登校となり悩んでいた時、参加したフリースペースに親子とも救われた。これらの経験により 2017 年、子どもにとって地域に安心できる居場所が必要と、「金沢子ども食堂すくすく」、ひとり親への食料支援と居場所として「ホッとサロンすくすく」を開設。

活動のきっかけ

家族を救ってくれたフリースペースとの出会い

長男が中学校１年生の時、学校でいじめにあい、それがきっかけで不登校となり、更にそのストレスを親や、弟、妹にぶつけるようになりました。もともと、友達と遊ぶことも好きだった長男にとって、学校に行けないことは苦痛だったと思いますが、家族もまた、長男が激高することに脅えて生活していました。そのような暮らしの中で、フリースペース「金沢虹の会」を知りました。

長男のためにと訪れた場所でしたが、長男は行こうという気持ちにはなってくれませんでした。でも、殺伐としていた家での暮らしが辛かった弟妹をつれて通いました。みんなで作ったご飯を食べ、遊ぶことで、いつの間にか私も弟妹も笑顔を取り戻すことができました。また、「金沢虹の会」には親の会もあり自分自身の思いをさらけ出し、支援者や同じ境遇の方に受け止めてもらうことができて、励まされ、不安感が和らぎ、心のよりどころとなっていきました。

ひとり親家庭のきびしい現実

福祉施設での勤務経験から、ひとり親家庭が様々な課題を抱え生活している状況を知りました。経済的に困窮していて親子とも健康的な生活が送れない、地域で孤立していて友人も少なく、困った時の相談相手がいない、子どもが問題行動を起こしても適切な対応ができないなど課題は多様であり時には複合的です。

団体概要

金沢子ども食堂すくすく

所在地	いきいきセンター金沢（金沢区社会福祉協議会）
URL	https://sukusuku.amebaowmd.com
開設年月日	2017 年 3 月
対象	子ども・親子
開催日時	毎月第 1 日曜日　12：00 ～ 15：00
参加費	子ども無料・おとな 300 円
参加人数	50 人（事前申し込み制）

ホッとサロンすくすく（ひとり親限定の食堂・食料支援）

所在地	いきいきセンター金沢（金沢区社会福祉協議会）
開設年月日	2018 年 6 月
対象	ひとり親家族
開催日時	毎月第 3 日曜日　11：00 ～ 15：30
参加費	無料
参加人数	20 家族前後（事前申し込み制）

地域でこうした親子を孤立させないために、困ったことがあれば「助けて」と言える誰かが、それに手を差し伸べてくれる誰かが必要だと思っていました。

子どもたちがより良く育つために必要な経験と仲間

地元の小学校で「わんぱく土曜塾」という体験教室が行われていて、そのお手伝いもしています。現代の子どもたちは、生活の中で、自ら考え、行動する経験がとても少なくなっていると思います。経験の少なさは、考えるチカラ、人とつながるチカラ、コミュニケーションのチカラといった「生きるチカラ」が育ちません。こんなこともやってみようという新しい取り組みへのチャレンジ精神を持つことができないし、仲間と一緒に行動する楽しさも知ることができません。

「わんぱく土曜塾」は、そんな今時の子どもの経験の少なさを補おうと創られた活動です。学校の授業では体験できない、木工、アウトドア、工作、調理、そば打ち等、いろいろなプログラムを実施しています。子どもたちは、いろいろな活動に参加します。

参加する中で、子ども自身が「この活動好きだな」という自分を発見したり、「もっとこんなこともしてみたいな」という想いが生まれて挑戦をするようになります。そんな時、子どもが育っているなと実感します。もちろん、一人で子どもが育っているのでもありません。仲間がいるから一緒に育っているし、大人の緩やかな見守りがあるから活動をもっと広げることができ、「すごいね」「頑張ったね」「面白いね」といった声掛けによって、子どもたちは、承認され、達成感も感じながら活動ができていると思います。

【子ども食堂すくすく誕生】 2017 年 3 月
食を通してお腹も心も満たす場所を作りたい！

2016 年 「子ども食堂」の存在を知り、「食を通してお腹も心も満たす居場所を作りたい」と思うようになりました。地域活動の立ち上げ経験も専門的な知識もないゼロからの出発です。

まず、友人、知人に呼びかけ、ボランティア人材を集めました。地域の商店を一軒一軒回り、食材の提供をお願いしました。嬉しいことに、少しずつ協力してくれる方や商店が現れるようになりました。場所は、金沢文庫駅近くのデイサービスセンター。施設側の厚意でデイサービス終了後のキッチンとデイルームを使わせていただけることになりました。体制も何とか整い、2017 年 3 月「金沢子ども食堂すくすく」がスタートしました。

【ホッとサロンすくすく誕生】 2018 年 6 月
ひとり親家庭の孤立を防ぎ笑顔でいられる場を創ろう！

ひとり親家庭の暮らしの厳しさが社会の中で顕在化してきたこともあり、子ども食堂とは別に、NPO 法人フードバンク横浜の力をお借りして、ひとり親家族に限定した「ホッとサロンすくすく」を月 1 回開催することになりました。ボランティアと参加者が一緒に昼食を作り、プレイスペースでは地域のボランティアと一緒に子どもたちが遊び、お母さんは、ネイルやハンドマッサージ、ヘッドマッサージでホッとできる、そんな時間を過ごしてもらっています。

フードバンクや協力してくれる企業、商店からの寄付された、お米、調味料、缶詰、レトルト食品、野菜、おかし、生活用品などたくさんの食材がならび、自由に持ち帰ることができるようにしています。また、子ども服のリサイクルも行っています。

不安な生活を支えることができるよう、子育て相談、悩み相談、時には弁護士の協力で法律相談、無料の歯科検診も開催しています。活動は口コミや SNS で広がり、今では戸塚区や旭区など遠くからも参加しています。

課題1　広報周知
資金・場所の確保

Ⅰ 活動周知

解決へのアプローチ
how to approach

「利用する人 (家族)」「一緒に活動してくれる人」「活動を応援してくれる人や団体」に周知

想いを持って始めた取り組みですが、実際に活動していくためには、周知も協力を仰ぐことも必要です。周知は、1）利用する人（地域の親子）2）一緒に活動してくれる人　3）後方的に活動を応援してくれる人（団体）だと思います。

具体策

広げる・広がる活動の輪

自分たちでのSNSでの発信や地域情報誌タウンニュースへの「子ども食堂すくすく」の掲載依頼などが実現し、私、個人からの声掛け以外にも、ボランティアとして協力したい方、食材を提供したいと申し出てくれるお店や企業の方があらわれました。こうした方々の協力によって、「子ども食堂すくすく」は、月1度、毎月開催。訪れる人たちも、赤ちゃんからお年寄りまで、毎回、50名以上の参加を得ることができています。

現在は、広報紙「すくすく通信」を定期的に発行し、支援してくださっている団体、お店、個人名も掲載して、感謝を伝えるとともに、協力、寄付の呼びかけを続けています。

また、毎回、「すくすく」の会場にも食材などの寄付をして下さったお店、企業の名前を張り出し、参加者にも周知しています。

食事の支援だけでなく、地域とのつながりや、友達づくりのきっかけになればと、ひとり親家庭にも参加を呼びかけました。こうした親子の参加を得て、食の提供だけでなく、子ども達も親同士も交流できるよう、ワークショップやちょっとしたイベントをするなどプログラムも工夫につながっています。

Ⅱ 目的を実現するための場所の確保

解決へのアプローチ
how to approach

お腹も心も満たす居場所の確保

子ども食堂を行うときに、どこで行うかということは、とても重要です。身近な場所で、安心して居られる場所であると同時に、調理室が整備されていることや、食事をする以外のプログラムを行うスペースなど、さまざまな要素があると思います。

他にも、ボランティアが食材や機材を運搬する必要があり、駐車場が確保できるか、また、利用者にとって最も支えとなる曜日や時間はいつなのか等、要望としては様々ですが、地域の中に、すべて叶えられる場所を借りることは非常に難しいことだと痛感しています。お金のかかる場であれば、叶うかもしれませんが、それに使える資金もありません。

具体策

①協力団体との調整による場の貸与

ボランティアや協力機関も増え、沢山の利用者も得ることができましたが、課題も生まれました。

「子ども食堂すくすく」は、18時オープンとしていましたが、デイサービスセンターをお借りしているため、お年寄りが帰ってからの16時半からでは、どうしても50名分の食事の準備は間に合わなかったのです。そこで、金沢区福祉活動拠点「いきいきセンター金沢」に会場を変更することになりました。私たちとしては、お母さんたちが夕食を作る心配をせず、子どもと、そこに訪れる他の親子やボランティア達と、ゆっくり過ごしてもらうことが願いで、それを実現するためには、土曜日の夕食を提供する子ども食堂が良いと考えていました。でも、毎月、土曜日の夕方というのは他の拠点利用団体との調整が必要で、それはかないませんでした。実際は、社会福祉協議会と相談の結果、日曜日の昼食提供ということになりました。

②食材や機材の搬入について

多くの食に関する市民活動の方々が悩んでいることではないでしょうか。子ども食堂を行うために、毎回の食材も50食分ある他、食器類や調味料等についても、常に持ち込みをする必要があります。また、食の提供以外のプログラムを行う場合は、その用具も持ち込みます。

こうした物を置いておけるスペース、また、搬入のための車の駐車場など、安定的に借りることができたなら、もう少し、ボランティアの負担も軽減できると思います。私たちには、解決しにくい課題の一つです。

Ⅲ 物資の提供

解決へのアプローチ
how to approach

子ども食堂への地域の理解を広げること、食材等物資の支援をお願いすること

利用者からの利用料や会費等を頂くことがしにくい活動です。ボランティアはすべて無償ボランティアですが、食を提供するに

も、食材が必要です。また、経済的に困窮している親子の場合は、子ども食堂での食の提供だけでは、支援の不足を実感することもしばしばあります。こういうことは、実際に、子ども食堂を行ってみて気づくことも多いのが現状です。

具体策

①地域の商店や企業を訪ねて、活動趣旨を説明して得る協力

立ち上げ期に、近隣の商店や企業を訪ね、活動趣旨に理解を頂き、協力をお願いしました。訪問したすべての機関から援助を受けられるわけではありませんが、知って頂くことの大切さ、何かの時に助け合える関係作りは大事だと思っています。

地元の農家さん、地域のスーパーマーケット、お寺さんからのお供え物の寄付など多様な人や団体に支えて頂いて本当に助かっています。チラシ、ホームページ等に協力して欲しい内容を具体的に示し、寄付の送り先を明記するなど、思い立った時に協力して頂きやすいようにしています。

②食支援団体の活用

「フードバンクかながわ」「食支援ネットかながわ」「神奈川フードバンク・プラス」に支援して頂いています。

ある日、既に子どもが二人いる生活困窮世帯で、妊娠中でもあるお母さんからのSOSの電話があり、一日1食しか、食事ができていない現状であることを聴き、「フードバンクかながわ」より、食材の提供をして頂いたことがあります。

食堂開始以来、南部市場の中の企業から、野菜を毎回頂いています。当初、頂ける野菜は、前日にならないとわからないので、メニューを予め決めるわけにはいかず、柔軟に対処しなければならなかったのですが、今ではメニューに合わせた野菜を揃えていただけるようになり、とても助かっています。

また、近隣の医療機関から寄付の希望を頂き、2年間、ふるさと納税を使って肉を提供して頂いています。こうした寄付は、一緒に活動するわけではないけれど、活動を気にかけて頂いている実感がありとても嬉しいです。

③他の子ども食堂との連携と情報交換

子ども食堂は、新しい取り組みであることが多く、私たちのように、活動してみて、新たに見えてくる課題も多いのではないかと思います。そういう点では、同じ活動者同士の日常的な情報交換が役立ち、励まされることも多い状況です。

課題2 支援者の関わり
活動内容

Ⅰ 食の提供以外の子どもへの具体的な支援の必要性の模索と実践

解決へのアプローチ
how to approach

子どもたちにどんな支援が必要なのか？

具体策

①子どもの育ちや自立を支えようとする支援

子ども達は食事ができないことのみが課題なのではありません。親の生活状態、世帯の経済的困窮などは、孤立や生活経験の不足を生み、子ども達の育ちや自立に大きな影響を与えています。支援者は、まず、それを理解していることが大切だと思います。

②医療・教育支援の必要性

子ども食堂以外にも、最近は、学習支援活動も地域に増えていると聞きます。こうした支援活動もとても大切だと思います。子ども食堂と同様、学習だけを支援するのではなく、子どもの育ちを支える意識が必要だと思います。子ども食堂をおこなっていて、気づくのは、子どもの健康です。家庭では、規則正しい生活や、病気に罹らないよう予防したり、罹ってしまったら療養したり、本来、当たり前のことを学ぶ場でもあるのですが、それができていない場合があります。「子ども食堂すくすく」では、歯科検診を近隣の歯科医院に協力して頂き行っています。

③様々な人との関わりや経験

人との交流の少なさや生活経験の少なさは、子どもの生きるチカラを育むことを阻みます。だからこそ、子ども食堂で、

さまざまな人に出会い、経験することを大切にしています。

子ども食堂ですから、まずは、健康的で季節感のあるメニューを心がけていますし、食事以外のお楽しみ活動としては、ゲームや工作、豆まきやクリスマス会などの季節のイベントも行います。また、場を貸してくださっている福祉拠点への感謝を込めて、参加の子ども達も一緒に、お掃除をすることも大切な取り組みにしています。

親たちにどんな支援が必要なのか!?

具体策

①ひとり親家庭の親と子ども達の生活力を高めるために

先に紹介した「ホッとサロンすくすく」では、参加するお母さんの中からボランティアとして食事作りを担う方も出てきました。地域のボランティアさんと一緒に食事作りをすることで調理方法や栄養バランスを考えた献立など大切な生活力を身につける場ともなっているだけでなく、地域の方々との自然な交流が図れています。

②日常生活に必要な食料や生活用品の支援

子ども食堂で食を提供するだけでなく、日常生活に必要な食材や生活用品の提供もできるよう心がけています。親が参加していない場合も、子どもの様子で気づけば、子どもに持って帰ってもらうこともあります。

③生活に潤いや癒しを提供する支援

困難を抱えて生活する人たちは、気分転換をしたり、自分を癒すことが苦手な人が多いです。頑張ることだけでなく、そういう術を身に着けることで、自立した生活を続けることにもつながります。だから、子ども食堂のボランティアや協力機関は、調理を担当できる人ばかりではなく、さまざまな人や機関が必要です。美容室、ネイルサロン、カウンセリング団体などに協力をして頂き、プログラムを行っています。参加のお母さんたちにもホッとした笑顔が見られます。

課題3　協力ネットワーク

Ⅰ 子どもや家族を支えるネットワークを地域で育む必要性

解決へのアプローチ
how to approach

子どもや家族を支えるネットワークを！

利用者の中には、ひと月に1，2回の食の支援では支えきれない困難を抱えた子どもや家族の場合もあります。そういうケースに出会ったら、「私たちはどうすることもできません」で済ませてはいけないと思っています。地域ケアプラザの包括支援センターにつないだケースもあります。

でも、多くのそういったケースが、今の社会保障のなかでは、具体的なサービスにつながりにくかったりして、困りごとに即対応というわけにいかない場合が多いと思います。

SOS を求めても、どこでも、どうにもならない経験をすると、助けも求めなくなってしまいます。子ども食堂にも来なくなる親子もいます。そういう時、非常に悩みますが、思い直します。複雑多様化する家族の暮らしの困難性に、教育、福祉といった公的な制度やサービスがなかなか届かない。だからこそ「助けてと言える場と時間」「甘えられる場、人」が必要。子ども食堂は続けていこうと。本当は常設の場、いつでもいける場が在ると良いなあと思っています。自分一人で始めた活動ですが、ボランティアや食材を寄付してくれる商店、企業、NPO、そして何より参加してくれる方々に育てられていると感じています。

これを何とか広げ、専門機関も含め、支えるネットワークが創れたらと思っています。

Ⅱ 必要な子どもや家族の支援の定着・拡大

解決へのアプローチ
how to approach

「すくすく」に来るこどもたちを見ていると、子ども達にとって、皆でご飯を食べ、体験活動をし、様々な年代のボランティアさんたちとのかかわりを通じて、安心して自分を出し、時には甘え、いろいろな人とかかわることで心を豊かに満たせる場になっていると感じます。「すくすく」の活動は月に1，2回ですが、子ども食堂の取り組みがもっと地域に広がれば、それを必要としている子どもは月に何度も利用することができます。町内会ごとにあれば、地域の大人が地域の子どもをより知ることとなり、地域での子育てができることになると思います。

もっと、活動が社会に定着し、広がっていくことを願っています。

取材を終えて

加々美さんのお話は、ご自身の子育てで、地域に支えられた経験と福祉施設での勤務経験からとても強い説得力ある「子ども食堂」の意義や価値が伝わりました。

「子ども食堂すくすく」や「ホッとサロンすくすく」を利用する人・共に活動するボランティア・活動を後方的に支援する人や団体にも強い共感があるのだと思います。活動を利用する沢山の親子の心と生活が支えられていることと思いますが、一連のお話を伺ってこうした共感を地域社会に育てていくことこそ、とても大切なことと思いました。多くの課題を乗り越えようとしている活動でしたが、心に残っていることとしては、複合的な困難を抱える子どもや家族に公的な支援が総合的に提供されることは難しい。それを実現するには地域と多様な専門機関の行き届く支援を目指すネットワークだけれど、それが、本当に難しいのだとのつぶやきでした。

Problem Solving

Case 2

外国につながる子どもたちへの学習支援

友(ゆう)ゆうスペース

神奈川区

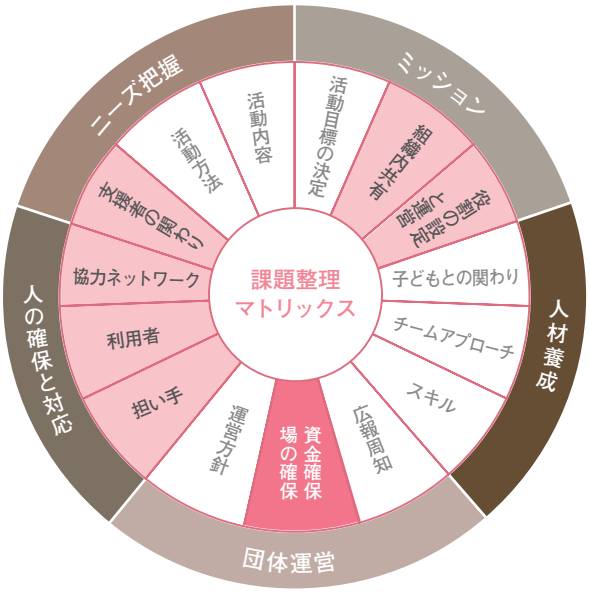
課題1	支援者の関わり
課題2	役割の設定と運営
課題3	資金と場の確保
課題4	利用者・担い手の確保と対応
課題5	協力ネットワーク

Problem Solving

Case 2

外国につながる子どもたちへの学習支援

友ゆう（ゆう）スペース　地域に多文化共生を広める



友ゆうスペースは、神奈川区内３か所で外国につながる子どもたちを対象に、日本語による学習支援を行っています。学習支援を通して子どもたちが学習への習慣や意欲を身につけるとともに、担い手であるボランティアを通じて地域に多文化共生を広めています。

この方にお聞きました

PROFILE

塚越 惠美さん（67 歳）

友ゆうスペース代表。2011 年、神奈川区国際協力ネットワークと区役所が共催したボランティア講座「学習支援者養成講座」を受講。地域での多文化共生を実現することの大切さを感じ、拠点づくりの活動に参画。また、外国籍の子ども達への学習支援の必要性や楽しさを感じ、国際協力ネットワークの有志と共に、外国につながる子どもたちへの学習支援グループを立ち上げました。友ゆうスペースとして独立した後、代表を務めています。

南崎　美智子さん（51 歳）

夫の転勤で、当時、小中学生の２人の子どもと共に、イギリスで生活をしました。子どもたちは、日本とは大きく環境が違う中、現地の学校の先生や地域の人たちに、お世話になり、無事に生活でき、子どもも成長することができました。帰国後、夫が初めに、友ゆうスペースのボランティアに参加し、その後、出張で活動できない時にピンチヒッターでお手伝いしたことをきっかけに活動をすることになりました。現在は、事務局およびはーと友（神奈川区保険・医療・福祉複合施設）教室のコーディネーターを担当しています。

横田　和子さん（69 歳）

友ゆうスペース副代表。2005 年、小学校教員を退職後、神奈川大学で女性学を学ぶ。同大学の教授の勧めで 2011 年、神奈川大学の学生たちが主体で行っている外国籍の子ども達を対象にした学習支援の活動のアドバイザーとして活動を始めました。そのつながりで、国際交流ネットワークの活動を知り、メンバーとの繋がりもできて、友ゆうスペースの活動に参加。現在は、副代表と、小学校内教室のコーディネーターを担当しています。

背景　background

神奈川区は横浜市内でも中区、鶴見区、南区に次ぐ４番目に外国人の多い区（2019 年約 7000 人）。横浜市では、外国人が日常の生活の困りごとの相談や、外国人同士が交流する場、日本語がまだ理解できない外国人への通訳の派遣依頼ができる機関としての役割を果たす、「国際交流ラウンジ」が 18 区中 10 ヵ所（2019.3 現在）整備されているが、神奈川区には整備されておらず、生活のしづらさを感じる外国人や、その子どもがいることが想定されていました。

団体概要

開設年月日	2017 年 10 月（友ゆうスペースとして独立）
スタッフ	ボランティア 40 名
活動内容	外国につながる子どもたちへの教科学習、日本語学習支援、夏休み宿題教室、夏休み理科教室、保護者の会、新年の会
対　象	小学生（外国籍または日本国籍でも日本語を母語としない子ども）
国　籍	中国（16）インドネシア（4）モンゴル（2）インド（2）ネパール（1）　ロシア（1）
URL	https://yuyuspace1014.web.fc2.com/
開催場所	①はーと友教室　神奈川区保健・医療・福祉複合施設「はーと友」
時期・日時	毎週土曜日　10：00 ～ 12：00（2014 年 4 月～） ②小学校内教室　区内小学校 毎週水曜日　14：00 ～ 16：00（2013 年 4 月～） ③神大寺教室　神大寺地区センター 毎週火曜日　15：00 ～ 17：00（2013 年 1 月～）
参加費	無料

活動のきっかけ

2004 年、神奈川区で活動している５つの国際交流・支援団体が連携し、区内において多文化共生の実現と国際交流の拠点が整備されることを目標に活動をはじめました。まず、区内在住の外国籍の住民の声や困りごとを知るために、聞き取りなどを進めていましたが、2011 年 6 月、外国籍の子ども達の生活も知りたい、また、生活のしづらさについて支えになればということで、外国につながる子どもたちへの学習支援を始めました。

活動をする中で、外国につながる子どもたちが様々な課題を抱えていることが見えてきました。生活のため夜遅くまで両親が仕事をしている家庭が多いこと。自営業、特に飲食店などを営む家庭については、朝から深夜まで、両親が店にかかりきりで、子ども達の生活が、学校では言葉や文化の課題があり馴染みにくく、家でもひとりぼっちといった環境におかれていること。また、外国人の両親が日本での仕事が軌道に乗るまで、子ども達は母国で祖父母に預けられて育ち、その後、呼び寄せられたものの、両親の日本語力も脆弱なうえ、子どもへの日本語教育も行き届かず、長く、学校になじめないでいる子どもが多いことなど、様々な子どもの課題が見えてきました。

また、仕事はしているものの、保護者の日本語力の弱さに、支援がなく、子どもの通う学校での様々な行事や手続きについて、保護者が理解できないために、その子どもたちの学校生活に、更に支障が出るなどといったことが起こっていることもわかってきました。こうした外国につながる子どもたちの課題が浮き彫りになる中で、学習支援だけではなく、こうした子どもたちが安心できる居場所が必要であると考え、2017 年、５つの団体のネットワークの総会で、ネットワークの一部門である学習支援部門が、独立する形で「友ゆうスペース」を設立しました。

また、ネットワークの目的としている、多文化共生の拠点整備についても、「神奈川区に多文化共生をすすめる会」として独立し活動を続けています。

私たちのミッション

活動目標

外国につながる子どもたちへの学習支援を通して、子どもたちが安心して学校生活を送れるようになること

友ゆうスペースを利用する子どもたちの家庭は共働き家庭がほとんどです。保護者の日本語力も脆弱な場合が多く、労働時間も長く、時間や心の余裕がありません。忙しいから子どもとの関わりは少なくなり、子どもたちは、家庭でも、地域でも、学校でも孤立しがちになります。言葉の問題を残しつつ、子どもは常に不安な気持ちを持ちながらの生活が続きます。子どもにとって、自分のことを見守ってくれている人、理解してくれる人が必要です。困ったときには、安心して助けを求められる大人の存在が必要です。

友ゆうスペースでは、ボランティアが、子どもたちとの信頼関係が築けるよう、子どもたちが安心して、ボランティアに声をかけられ、困ったことが言えるようになるよう心掛けます。

学習支援活動としては、教科学習という点では、教師の資格があるボランティアもいますが多くは素人で教える力は十分とは言えないと思います。また、日本語指導の資格を持っている人も少数なので、こちらも、専門性が十分あるとは言えません。それでも、家に１人でいることの多い子どもたちが楽しみに休まず来てくれます。学校ではなかなかコミュニケーションが取れない子でも、ここでは同じ母語の子と母語で思いっきり話せたり、ケンカをしたり、子ども同士の繋がりができます。こうして、私たちは、活動の中でミッションを果たしていこうとしています。

外国につながる子どもたちを支える地域のチカラを育てたい

外国籍の家族が日本で生活していくことは、簡単なことではないと、学習支援活動を通して痛感しています。子どもの希望とは無関係に、小学校高学年や中学生で、日本で暮らすことになった子どもは、学習面でも難しくなってきており、友人関係も幼児期とは異なる複雑さが要求されます。その中で、言葉の問題があれば、勉強への意欲も大切な友人関係さえ築けなくなり深刻です。

地域で、私たちの学習支援の場も含め、地域の様々な人から、語りかけられ、見守られていたならば、子どもたちにも、自分のことを発信するチカラ、考えるチカラが身についてくると思います。そうした経験を繰り返すことは、生きるチカラにも必ずなると思います。私たちの学習支援活動は、学力の向上にはそれほど役立たないかもしれませんが、彼らを受けいれ、安心できる場として、地域の中にあり続けたいと思っています。

課題1　支援者の関わり

Ⅰ 子どもの生活支援

解決へのアプローチ
how to approach

学習支援をしているから気づく、必要な子どもへの生活支援

具体策

①限界があるなかで必要と感じる「食」の支援

忙しく働いている保護者が多く我が子への配慮も不十分な家庭があるのも現実です。朝ご飯を食べていなかったり、教室にパンを買ってくる子ども、夕飯も一人で食べることがある子どもなど、さまざまな子どもがいます。ボランティアスタッフは、それがわかっているし、気になっていますが、今はおやつを出すくらいしかできていません。

②生活経験の少なさによる子どもの生活しづらさ

参加している子どもに、こんなエピソードがありました。夏休みに、小学校から横浜市の18区のうち訪れたことのある区に印をつけるという宿題が出たそうです。でも、その子どもは、神奈川区と西区にしか行ったことがない。また、ある中学生は、「美術館に行ってみよう」という宿題が出たときに、生活の中で体験的なことがほとんどなく、美術館の場所さえ分からなかったため、ボランティアが一緒に美術館に行ったとのことです。子どもたちの多くが、学校と家と親の働く場くらいしか知らないと思います。

宿題ができなかった子どもの寂しさもありますが、エピソードのなかで、スタッフはこうした経験の少なさが将来に夢を持つことなども阻むのではと感じました。もっと様々な体験を子どもに提供することも考える必要があると思うのと同時に、子どもとの対話の中で、少しでも補えればと考えています。

Ⅱ 保護者のサポート

解決へのアプローチ
how to approach

保護者にも地域とのつながりを

保護者会を開催して、交流を進めるとともに、相談事にも乗るようにしています。

国際教室のある学校も個別の子どもにしっかりかかわる時間が不足しているし、外国籍の子どもが少数の学校は、国際教室がないのでますます個別の生徒、まして、保護者への支援は届かないでしょう。保護者も地域とつながる機会がなく、孤立し、必要な情報さえ得られないことも多いはずです。

また、なかなか自ら自分の事を語るという機会が少なく、それが地域と繋がりにくくしている場合もあります。今年の保護者会では、それぞれの国のお正月のようすを話してもらい、その家族を理解してもらうきっかけとなり和やかな時間を過ごすことができました。

課題2　役割の設定と運営
組織内共有

Ⅰ ボランティアの役割

解決へのアプローチ
how to approach

子ども達との信頼関係を創れることを第一に

具体策

①担当制を決めたマンツーマンでの対応

友ゆうスペースは、現在40名のボランティアが登録しています。年代は高校生から80歳代まで幅広く、資格は特に必要としていません。子どもと楽しく勉強できればOKです。時間もできる範囲で手伝っていただければ良いことにしています。基本はマンツーマンで対応し、なるべくそれぞれの子どもには同じボランティアがついて、関係性が作れるよう配慮しています。

はーと友教室

学習はマンツーマンで

②配慮の必要な子どもに適切な対応を

現在、区内３か所で学習支援をおこなっていますが、それぞれの教室にコーディネーターを配置し、その日の参加する子どもとボランティアの配置を考えています。

年１回の総会のほか､全体での定例会は年３～４回実施し、毎回、終了後に振り返りをして、気になる子どもの状況や課題について共有しています。特に、課題のある家庭の状況については、子どもへの配慮を適切に行うために、担当スタッフの間で共有しています。

Ⅱ 組織整備と3つの教室に分かれた情報共有法

解決へのアプローチ
how to approach

組織体制の整備をしました

小さな組織ですが、３か所の教室を現在運営しています。これを実現するには、役割の明確化とその役割を果たすキーパーソンを決定する必要がありました。また、定期的な会議の開催も決めています。区内で外国籍の子どもの多い地域が他にもあり、教室の運営ができないかと要望を受けたことがありますが、現時点では、３教室を同時に運営できている状況です。

具体策

①3つの教室の責任者に代表・副代表・事務局を配置

３つの教室を運営していくためには、場を提供して頂いている学校や関係機関との調整が必要になります。また、ボランティアの確認や、参加の子どもの把握なども行わなければなりません。そのため、それぞれの会場に責任者が必要になり、３名の責任者を配置しました。また、これらの責任者は、基本的には毎回ボランティアが、担当の子どもに対応することになっているので、そういったコーデイネートもしています。

②責任者会議の開催

日常的に、３名の責任者は個々の教室、また全体の教室の状況を把握するように努めています。年一回の総会の他、年に３回～４回定例会議を開き、各教室の運営上の課題や気になる子どもの対応など共有するようにしています。

課題3 資金と場の確保

Ⅰ安定的な運営

解決へのアプローチ
how to approach

安定的な運営のための財源の確保と外部協力の必要性

具体策

①ボランティア自身が納める会費が主な財源

現在の運営は区社協の助成金９万円 / 年と、ボランティアが納める 1000 円 / 年の会費（高校生 500 円 / 年）が運営資金の全てです。ボランティアの中には、バス等を利用して活動している人もいますが、交通費の支給はできません。イベントの経費としてはロータリークラブの助成金を当てています。また、おてらおやつクラブさんからのお菓子をいただいています。

②場の継続使用のために続ける努力

小学校とは毎年２月に次年度のお願いをして継続できるようにしています。神大寺教室は地区センターとの共催事業のため、場所は確保されています。神奈川区保健・医療・福祉複合施設「はーと友」では、事務局が６か月前に予約を取って利用をしています。最近は使用する団体も増え、現在は毎週使えていますが、利用者連絡会で同じ団体の利用を指摘する声もあり今後も継続して利用できるかが少し心配な状況です。責任をもって活動を続けていくには、資金もですが、場は本当に重要です。

理想は常設の拠点があれば一番良いと思います。ラウンジがほしいです。立派な施設でなくてもどこかの施設の一部屋でも使えないかと思います。地域に理解して頂く努力を続けていかなければと思っています。

今年の書初め大会

多文化の作品が完成

課題4 利用者・担い手の確保と対応

Ⅰ 更に求められる支援の必要な子どもの発見と教室利用の促進

解決へのアプローチ
how to approach

広報ツールを活用した支援の必要な子どもや家庭への活動周知

神奈川区国際協力ネットワークから独立した「神奈川区に多文化共生をすすめる会」が神奈川区子育て支援拠点「かなーちえ」と協力して1冊のファイルにまとめた外国につながる親子に向けての地域情報を、神奈川区内の小中各学校で子どもや保護者への対応、相談、情報提供に活用してもらうよう配布・更新しています。そこに友ゆうスペースも紹介されています。しかし支援を必要とする子どもにきちんと情報が届いているか分かりませんし、教室から遠い地域の子どもには対応できていないのが現状です。

社協の協力によってボランティアが参画

ボランティアには幅広い年代の方がいます。比較的年齢の高い方が多く、子どもにとってはおばあちゃん、おじいちゃんに勉強を見てもらい一緒に遊んでもらっている感じです。区社協のボランティアセンターが積極的にボランティアを紹介してくれています。神奈川区の広報にも載ったので3名新たなボランティアが加わりました。

課題5 協力ネットワーク

Ⅰ 福祉関係機関・福祉関係者とのつながり

解決へのアプローチ
how to approach

区社協とのつながり、主任児童員とのつながりで子どもの情報を得る

区社協で年1回、主任児童委員と子ども食堂や学習支援、居場所などの団体の情報交換会があり、そこでつながった主任児童委員と気になる子どもの情報共有をしています。

先日も以前、友ゆうスペースに通っていて気になっている中3の女の子が、定時制の高校を受験する気持ちになっていることを主任児童委員さんから聞き、安心したところです。

地域の社会資源を活かして子どもたちの生活しづらさを支える

友ゆうスペースの対象は小学生までですが、中学に進学した子どもも何人か参加しています。ここでは中学生の進学指導までは自信がないので、中学生には県民サポートセンターで活動している他の団体や他区の国際交流ラウンジを紹介しています。

国際教室の先生や国際教室のない小学校では、児童専任の先生とは連絡を取っています。小学校内教室では、担任の先生も時々来ていただいていますが、もっと連携ができて、様子を観て頂けるようになったらと願っています。

取材を終えて

■外国籍の子どもへの日本語支援について
- 来日直後の母語支援・日本語支援が非常に脆弱なこと
- 生活言語ができていると学習言語もできるかのような誤解が教育現場にあること
- 社会保障でも担うべき、日本語指導をボランティアに頼っていること

■居場所の必要性
- 多様な人との関係性を持つために
- 不足する生活経験を補える場として
- 徒歩圏内で気軽に行ける場として

■必要な居場所を社会で守っていくためには
- 行政の手助け（財政的・人材的）

友ゆうスペースに限らず、今回の取材団体は、一様に、社会的な課題を発見して居場所を創り、更に、その運営を続ける中で新たな課題を発見し、それを仲間と共に如何に解決できるか考え行動していました。

ここで、語られた内容は、この先、個々の団体のみで解決するのではなく、社会全体の課題として捉えるべきことと思います。